

「たたく」・「突く」ということは、人間の自然・本能であると思う。少しも難しいことではないように思います。ところが、その「たたく」・「突く」の剣道をやってみて、やればやるほど難しくなるように思う。どこまでいっても際限がないように思われてなりません。

剣道の修行は、始めは技から入るが、しまいには精神に入っていく。だから無限あり、難しくなるのです。元来、技というものは、結局「打つ」・「突く」の二つである。どんなに器用な人でも、どんなに技の早い人でも、人間のすることであるから、技においてはそう大差のあるはずのものではない。だから、ある程度まで達すると、技については、ほとんど同じ程度になる。ところが、実際において、大先生、たとえば齋村先生のような先生に向ってみると、その技がいつこうに通じない。通じないどころか盤石にぶつかっているような感じであり、また、大木が倒れかかってくるような恐ろしき、脅威を感じる。それは、相手の精神力によって、こちらの精神力を封じられるからであって、だからこそ手も足も出ないのである。つまり、気合いにおいて既に負けているのである。諸君はまだ大木が倒れかかってくるような脅威を感じる相手と稽古した経験はないであろう。それは、まだ夢中で竹刀を振り回しているだけの剣道であるからだ。まだ、そこまで達していない。未熟だからである。

気合とは、大きな声を出して、ヤーヤー言うことではない。気と気を合わせるもの、つまり精神との戦いで、いわゆる「気」でもって気を打つことである。

齋村先生はよく言われた。「まず勝って打て！」と。まず、気でもって相手を打ってしまつて、しかるのちに技をもつて敵を打てという意味です。

例えば、私が国士館で学んでいた頃ですが、生徒の稽古終了後、馬田助教が齋村先生にお願いする。我々は興味をもつて見学。齋村先生はすでに気で勝たれているから、あの馬田助教が竹刀を振れない。自分より技量が下の者と稽古する場合は、千変万化の妙技を尽くして相手を打てても、本当に心の修行をしてきた先生に向かうと、ほとんど構えたりきりで、竹刀など振れないで、それで息が上がってしまう。どうしようもない。これは、結局、技でなく、気で圧倒されているからである。これが、「まず勝って打て！」ということですよ。

以上申し上げたが、私は話が下手なので、諸君にわかってもらえたかどうか、はなはだ心もとないのだが、剣道の修行は、技の修行ではないということですよ。

一言でいえば、いざ鎌倉に、水火の中へも敢然と飛び込み、盤石の下に敷かれても滅せぬ心、つまり「金剛不壊の心の錬成」、これが剣道だと思います。そして、これを日常生活体験のなかに生かすのが剣道修行だと思っております。

ちよつとした障害にぶつかつても、へこたれてはならない。

「自ら省みてなおくんば千万人といえど我行かん」。かく言う私もいまだ出来ないで悩んでいるのですが、そんなところに着眼点を置いて、日々生きたいと念願しているような訳です。お互い修行して腹と腹で付き合える男同士になろうではないか。

折角、剣道を始めた諸君ですから、これからも続けて頂きたい。悪いことなら勧めはいたしません。タバコの煙でむんむんするような不衛生な部屋で、徹夜でマージャンをする暇がいたら、道場へ遊びに来て下さい。小生は剣道教師ではないが。

最後に、諸君の健康と成功を祈ります。

